

# さいたま 川柳



オステオスペルマム

## 持ち駒とSINJYU

願法みつる

現代版の将棋は、戦国時代の武将たちが好んだとも言われている。その理由は他に例のない持ち駒（取った駒の再利用）ルールにあるらしい。駒数が減らないことで、終盤の攻防が極めて複雑になるのだという。戦の場の陣形や兵力配分に戦術的戦略的な思索が求められる興奮は高尚であろう。歴史物語や現代作品でも、将棋的な感覚の逸話や創作が非常に多い。

下って明治以降の近代日本における人材活用の在り様も、当初は、将棋的発想であったような気がする。限られた人材という駒を、情も活かしながら、柔と剛に使い分けた機微は、まさに日本的な姿である。

将棋という知的遊戯の盤面を、川柳という知的文芸活動の場に例えると面白い。川柳界という盤上では、川柳人たる各様な駒が、多くの吟社などに所属して渾然とした活動を楽しんでいる。確かに駒は老齢化し、減少もしているが、その機能は向上さえしている。

現在、多様な川柳をものする持ち駒が非常に多い。とすれば、川柳各吟社も川柳界も、現時点では人間性豊かな将棋を悠然と楽しむような、姿勢と雰囲気創造して、将来へ方向付ければ良いのではなからうか。

## 十月号 目次

堅太郎句抄(二十一)	願法みつる	表紙	2
巻頭言 持ち駒ということ			
彩玉集 一人吟			
拝啓 川柳様 其の十(最終回)	大塚やまぶき		6
雑詠	願法みつる選		9
映像	石田 正則		9
七七句	松田重信選		18
さいたまの柳人(38)	須田 昭		22
新同人紹介			
古丘の世界	文・今村 寿子		23
交替鑑賞 「行間を詠む」	木崎 榮昇		24
初歩添削講座「騙す」雑詠	加藤孤太郎		26
題詠 「泣く」 前島 滋朗	選		30
「似る」 長瀬久太郎	選		26
「月」 奥木田冬花	選		26
さいたま九月句会			
初歩添削講座はみ出し編	加藤孤太郎		32
大会等「案内			
編集さろん			
句会案内			
表紙(題字・清水 美江 写真・千葉 古丘)	表紙		4
	表紙		3
			38
			37
			32